

きょうはまず、『マルコによる福音書』1章40～45節が山浦先生の『ガリラヤのイエシュ』ではどう書かれているのかを読んでみます。そして、〈奇跡物語〉が内包している大切なイエスのメッセージとは何かをさぐります。

守 〈奇跡〉物語（2） 『重い皮膚病を患っている人をいやす』（その2）

山浦玄嗣先生の『マルコ』1章40～45節を読んでみましょう。（原文を引用）

【注】『ガリラヤのイエシュ』の登場人物たちは、北は津軽から南は薩摩までの各地の〈ふるさとの言葉〉で語ります。例えば、イエスは「ケセン語」（岩手県気仙地方）で、ギリシャ人は「長崎弁」で話し、公的な改まった発言や地の文は「幕末期の日本語風」など、13の方言で書かれています。また、所どころに小さく「この活字(HG丸ゴシックM-PRO)」で書かれた文があります。これは山浦先生の補足文になります。私たちには意味が良くわからない語句や時代的・社会的背景を説明してくださっています。何とありがたいことでしょう！『新共同訳聖書』と読みくらべてください。その思いやりに感謝です。

『40 さて、腐れ病くさ やまいの人がイエシュさまのところにやって来るのでござる。この人は
体中くす くさ崩れ腐れ、にじみ出る血うみと膿なみにまみれ、見るも哀れな姿でござる。人の踏みこまぬ町外れの洞穴
などに人から離れて隠れ住んでいなければならぬ穢けがれ人がこうして人中ひとなかに出て来るのはあり得べからざることで、これを見た人は驚き恐れ、一斉に跳びすさり、はげしい罵りの声をあげて追い払おうと致した。ある者は石を拾い、ある者は杖つえを振り上げ、今にもこの不埒ふらちな者を叩き出そうと身構えてござる。さればこの人は死に物狂いの様子にて、その場に
膝をつき、手をすり額ぬかを地べたに押しつけて、〔必死に〕願いつつ言うには、「お前めア様がそのきになりやらば、俺おれアをサッパアと治なほすにいいがねんす（治なほせますよね）！」 41 その気きの毒どくな有り様ようにイエシュさまは腸はらわたも干切れるほど気きの毒どくに思いなさり、手を伸べて、その人をガッチリと掴つかみなさった。そして
力強ひなき鄙ひなの言葉にて（「鄙」＝都から離れた土地。田舎。）
言いなさるには、「勿論もちろんそのきだ！ サッパアと治なほれ！」 42 すると、たちまち腐れ病くさ やまいの魔物まものが逃げ去ってしまい、その人は頭から足の先まですっかり清らかな体になってしまったのでござる。
43 ところが、イエシュさまは、にわかに鼻息を荒げ、すぐにその人を追い立てなさった。
44 そして、言いなさるには、「いいが、この事ことを誰たれにも何なんも語かたんなよ（言うなよ）！』
そうでねアど、兎とに角かづ、人の口くちアがうるせア。
ただ、祭司かんなぎの所ところへ行って、その体からだを見せろ。そして、お前めアさんが治なほった証あかしに、モーセさまの決きめだお供物そねアものを捧たげろ。』 45 ところが、何々、その人はそこを去ると、
嬉うれしさのあまりたちまちその戒いましめを忘れてしまい、
あっちでもこっちでもこの話を語って歩きはじめるのでござる。
されど、何せおぞましき腐れ病くさ やまいの体に触れたのでござれば、イエシュさまはその身に穢けがれを受けており申す。このこと遍あまねく知れ渡り、
イエシュさまは〔穢けがれを受けた者として〕おおっぴらに町にも入りかねる次第しだいとなって〔やむを得ず〕
町の外の淋さびしく荒れ果てたところところにいなさったのでござるが、そんなイエシュさまのお側そばへあちらからもこちらからもたくさんの人々が

期待に目を輝かせ、胸躍らせて
引きも切らず慕い寄って来始めたのでござった。

「腐れ病」という言葉は強烈な印象を受けますね。しかし、前回書きました山浦先生のお考えを十分に表わすには、この言葉以外なかったのだと思います。

あまりにも簡単な描写なのは、なぜ？

ここで、イエスがこの患者を治す場面に注目してください。

40 さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。41 イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい、清くなれ」と言われると、42 たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。

イエスが患者に手を触れ、「清くなれ」と言うと、すぐ癩病は治った — とあります。その描写はあまりにも簡単で、あっけなく思いませんか。同じ話を載せている『マタイ』8章1～4節と『ルカ』5章12～16節も、同じように簡潔に書かれています。

たとえば、あなたが福音書記者だとします。自分には〈イエスが救い主であり、神の子であり、彼が人間を超えた存在であった〉ことを伝える役目があります。それを証しするための一つの手段として「奇跡物語」を用いるとすれば、こんなに簡単な文章で書き表わすでしょうか。

わたしなら、『イエスは「神よ、どうかこの者の病をぬぐい去りたまえ」と天の父に祈りを捧げ、患者に手を伸ばして触れた。すると、顔、手、足 … と、次々にその病変が消え、たちまち元の体に戻った。男は躍りあがって喜び、あふれる涙をぬぐおうともせず人々に体を見せてまわった。それを見た者たちは口々に叫んだ。「これを神の子の業と言わずして何と言おうか。…」』などと、その力の素晴らしさを誇示するような文章を書くような気がします。では、なぜ福音記者たちはこれほど簡潔な文章で済ませたのでしょうか。

病者を「罪」や「差別」から解放し、社会に復帰させるイエス

2009年の夏期神学講習会で、とても有意義な話をしていただいた大貫 隆先生(おおぬき たかし、東京大学名誉教授)は、『奇跡そのものの報告は、「たちまちらい病は去り、その人は清くなった」のたった一言で済ませられ、『厳密には、もはや奇跡物語とは呼び得ない体のものである』と書いておられます。また、『語り手の関心は、癒しを求めてイエスに接近し、癒された後は祭司のもとへ送り出される男の方に、初めから終わりまで集中している』と指摘されています。

そして、この話の語り手は、イエスという人間の生まれつきそなわった性質や才能(奇跡を行う力など)を聞き手に伝えようとしているのではなく、『純粹に自分の経験(言わばイエス経験)を言葉にして伝えようとしている』、『それはイエスにおいて初めて一人の人間として向き合ってもらえたという解放体験である』とされています。(傍線は筆者。以下同様)

前回、当時「重病」は「罪の結果」として考えられ、病者は社会的・法的にも差別を受け、排除、隔離されたことを書きました。大貫先生は、この話の語り手が託したのは『自分がイエスによって受け入れられ、再び社会の中へ戻ることを勧められたという経験』であり、『これが彼にとっての「奇跡」であったのだ』と解釈されます。

いくつかの治癒奇蹟物語の最後の箇所によく出てくるイエスの言葉に、「行きなさい」、「帰りなさい」というものがあります。たとえば、12年も異常出血（出血が止まらない病）の女性を癒す話が『マルコ』5章25～34節にあります。この病は「不浄なる病」とされ、ユダヤ教にとって祭儀的に不浄であるだけでなく、彼女が触れたもの、および彼女の触れたものに触れる者も穢れ（けが）るとみなされていました。その女性がイエスの着物に触ります。すると『すぐに彼女の血の源泉が乾き、彼女は自分が苦しみから癒されたことを体で悟った』という話です。この34節に『安らかに行きなさい。そしてあなたの苦しみから[解かれて]達者でいなさい。』とあります。（岩波版『新約聖書』より。佐藤 研・訳） この34節を、山浦玄嗣先生訳でお読みください。

『お平安がに^{しずか}に行きなれ！ この苦しい病^{やめア}が治ったのだから、後^{あとア}はもう何も気にしねアで、ずっと達者^{たつま}で晴れ晴れど暮らしなれ（暮らしなされ）』

また、『マタイ』9章1～8節には「中風の人を癒す奇蹟」の話があります。人々が中風の人を寝台に寝かせたまま、イエスのところに連れてきました。『そこでイエスは彼らの信^{しん}頼^{らい}を見て、（中略）「しっかりしなさい、子よ。あなたの[もろもろの]罪は赦される。』』と言ひ、『起きて、あなたの寝台を担ぎなさい、そして家に行きなさい』と書かれています。（同書。佐藤 研・訳）

「あなたの病は、あなたや家族が罪を犯したからではないのだ。ましてや、まわりの人たちがあなたや家族を社会から村八分にするなんて、とんでもないことだ。これからは何も心配せずに、家族や友だちのもとに帰り、一緒に元気に明るく暮らしなさい！」という〈罪や差別からの解放〉がイエスによって宣言されています。

「命がけ」で近寄った人たちのイエスへの〈信頼〉

『マルコ』5章を詳しく読んでみましょう。

25 さて、ここに12年間も出血の止まらない女がいた。26 多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。27 イエスのことを聞いて、群集の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。28 「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。29 すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体に感じた。（新共同訳『聖書』）

山浦先生訳での27～28節は、次のようになります。

27 イエシューさまの評判を聞いてきたその女子^{おなご}は、人混みに揉みくちやにされながらも、夢中で人を掻き分け掻き分け、前に進み出ていった。血の穢れのある女子^{おなご}に触れれば、その穢れ^{けが}が移る。それを^{はら}うには着物を水で洗い、沐浴せねばならぬ。それでもなおその日一日は穢れている。こうして人混みを掻き分けて行けば、穢れ女子の触った人々にその穢れを移す。これが知れたら、穢れを移された男どもは怒ってこの女子に石を投げつけるかもしれない。されば女子は恐ろしさに震えながらも、必死の面持にて、後ろのほうからその〔青白くか細い〕手を差し伸べて、イエシューさまの上着にひしと取り^{すが}縋った。それというのも、その女は常日頃^{つねひごろ}こう申していたからでござった。28 「あのお方^{がた}のお着物^{ぎもの}にでもお^{すが}縋り申さば、必ずこの病^{やめア}の苦しみがら助け出していただけるはずでござりすよわ（ございますよ）。」

「重病人」が群集に紛れ込むこと自体、「穢れを移す」と考えられていましたから、やってはいけないことでした。イエスの着ているものに触ったらイエスが穢れることになります。さらに、イエスの着物に触ったことがほかの人に気づかれれば、彼女はどんな仕打ちを受けても文句は言えない状況に追い込まれます。

彼女はまさに「命がけ」で近づき、そこでイエスと出会います。あなたが彼女の立場だったらどうでしょう。もしも他の人に気づかれたら … と考えると、相当な覚悟が必要です。でもこの女性は一歩前に進み出ます。まさに〈賭け〉です。『あの方の着物にでもいいから触れば、私は救われる』という一途な思いが、それをさせました。今回、冒頭に引用した「癩病患者」も同じ気持ちでイエスに近づきましたね。『お前様がその気になりやれば、俺をサッパど治すにいいがねんす！』。そして、イエスは治癒を行ったあとに言います。

『娘よ、あなたの信仰があなたを救った。』

【山浦・訳】『母さん、この俺を頼りにしてけでる（くれている）その心がお前さんをあの病がら助け出したのだぞ。』

『神の国』における交わりが病を癒す

佐藤先生は、イエスの治癒物語は『患者および患者をとりまく親族たちに対して、「いやされる」ということに賭ける勇氣、社会の通念まで一歩ふみこえるような勇氣を暗黙のうちにアピールしている』と考え、『この勇氣があつて初めていやされる。これが「信頼」といわれているもの』であり、「あなたの信仰が」ではなく、「あなたの信頼が」あなたを救った — と訳してみたいとお書きになっています。山浦先生のおっしゃる『この俺を頼りにしてけでる（くれている）その心』です。

イエスは「わたしがあなたを救った」とは言っていません。自分に対する「あなたの信頼があなたを救った」と言っています。ここに神と人間とのあるべき関係が示されています。

佐藤先生は、『イエスは、その中で人々がいやされていった救済空間のダイナミズム（「力強さ、迫力」）を、「神の王国 / 支配」の力の発露と理解』していたと考えます。イエスは自分の能力で人々をいやしていったのではなく、自分のもとに「命がけ」でやってきた人間と出会うことによって生じた「神の国」＝「神さまが取り仕切る空間」のダイナミズムが人々をいやすのだ、ということです。これこそ、「治癒奇跡物語」が私たちに贈る大切なメッセージなのです。ゆえに、マルコ・マタイ・ルカは、これらの〈奇跡〉について必要以上にくわしく描写する必要はなかったのです。

【引用・参考にした書籍】 ・山浦玄嗣『ガリラヤのイエシュー』

- ・佐藤 研『イエスの父はいつ死んだか 講演・論文集』より「第8章 イエスの福音といやしのおぼえ」
- ・大貫 隆『イエスという経験』より「第V章 イエスの生活と行動」（岩波現代文庫、2014）
- ・新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』（岩波書店、2008） ・日本聖書協会『聖書 新共同訳』